

特集

# 環境で地域を 元気にする！

地方の人口減少・超高齢化という問題に直面している日本。これらの課題を解決するために、政府は成長戦略の目玉の一つとして「地方創生」を掲げ、地域の活性化がこれからの日本を支えるカギになるとしています。本号では「環境で地域を元気にする！」をテーマに、環境を軸に地域再生に取り組んでいる事例を紹介いたします。また、総括インタビューでは、長い間環境保全活動の最前線を歩んでこられた「特定非営利活動法人菜の花プロジェクトネットワーク」代表の藤井絢子さんに、NGO・NPOは地域でどう活動していくべきか、ご自身の経験を踏まえてアドバイスをいただきました。



**あいつエコプラザ 菜の花館**  
資源循環型の地域づくりを進める拠点施設。BDF・せっけん・菜種油の製造プラントの他、環境学習のための施設を完備。すぐ隣は道の駅「あいつマーガレットステーション」

住民自身による  
地域づくり

琵琶湖を第二の水俣にしたいけないと、「せっけん運動」を始めたのが1970年代後半。以来、環境専門の生協を立ち上げたり、家庭の天ぷら油を集めてBDF（バイオディーゼル燃料）を作ったりと、いろいろな活動に取り組んできました。

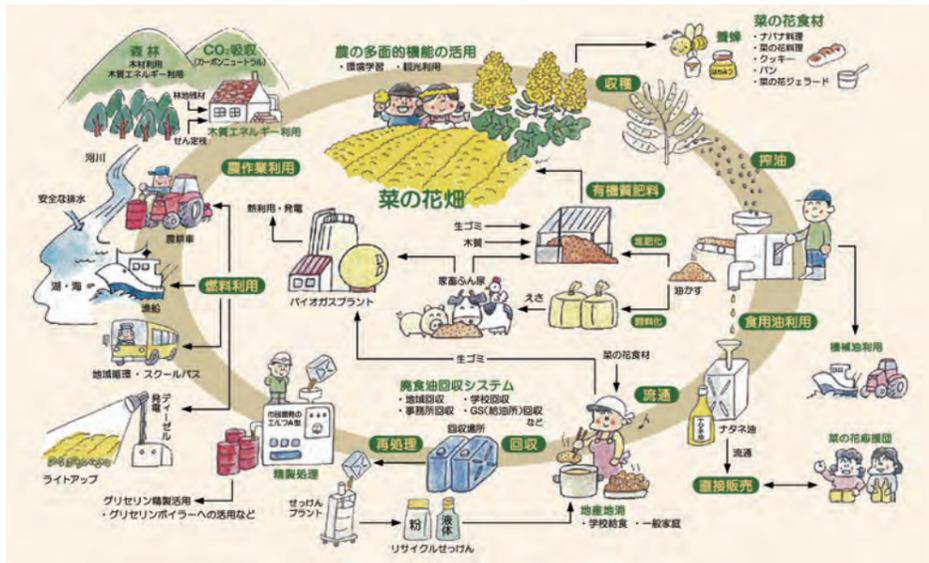
総括  
インタビュー

GDPでは表せない豊かさもありますが、継続するにはお金が回らなるとダメ。環境に良いことをしたら、少しでも自分の懐が潤う。つまり、事業化することが重要で、行政を動かす際も、その活動が地域経済にどう寄与するか伝える…、そこはとても大切なポイントです。

## つながることから 生まれるアイデア

ここ数年、琵琶湖の問題は森の問題でもあったと考え、森に入ることが多くなってきました。この辺りの山はかつてマツケの宝庫で、蹴飛ばすほど生えていたそうです。放置された山をもう一度動かそうと、森の手入れを始めました。まだマツケは生えてきませんが、間伐材を利用して、まきストーブのある家を作ろうといった活動にも発展しています。

私は、自分たちの運動には常に足りないことがあると思っています。だからこそ、いろいろな人とつながることが大切。この地域には、さまざまな分野から100人以上のメンバーが集まる「総寄り」という集会があります。みんなと話せば新しいアイデアが生まれるし、自分たちの活動に足りない知識・技術を持つ人も紹介してもらえる。足りないことを自覚し、人と会い、動くことですね。



## 菜の花プロジェクトの 資源循環システム

地域の中で資源がどのように循環し、地域住民がどう関わっているのかを示した図。東近江市をモデルに全国各地で同様の取り組みが進んでいる  
図版提供: 特定非営利活動法人菜の花プロジェクトネットワーク

# 地域にはすごい底力がある

もちろん苦労しましたが、今思うと、住民自身が参加し行動する中で運動の意味を理解できるようなったことが大きいと思います。住民の意識が「行政は何もしてくれない」ではなく、「自ら行動して行政を動かす」に変わっていったのです。

それから、町の人だけでやっていたら、これほど元気にはならなかったと思います。私は、目先の成果だけでなく10年、20年先を見据えて活動することが大切、そして「自分たちだけではできないから、いろいろな人の知恵を借りましょうね」と言い続けてきました。

菜の花プロジェクトは、国に先駆け、東近江で循環型社会のモデルをつくらうと始めたプロジェクトです。住民や行政、農業者も含め、いろいろな分野の人と連携する…、

## 特定非営利活動法人 菜の花プロジェクトネットワーク代表、 地球環境基金助成専門委員会委員 藤井絢子さん

1946年横浜市生まれ。上智大学文学部卒業。特定非営利活動法人碧いびわ湖(旧滋賀県環境生活協同組合)監事、環境省中央環境審議会委員、リサイクルせっけん協会会長、バイオマス活用推進専門家会議委員、内閣府地域活性化伝道師、日本環境会議理事などの委員を務める。著書に『菜の花エコ革命』『菜の花エコ事典』『ナチュラルの菜の花畑から』(創森社)。受賞歴は日経WOMAN「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2003」、「平成25年度地域づくり総務大臣表彰」大賞など。

小さなモデルですが、思いはとても大きい。地球温暖化防止というと分かりにくいけれど、菜の花であれば「これなら、私たちにでもできそう」と共感を持ってもらえます。

## 小金が回る 仕組みをつくる

環境先進国・ドイツには何度も行っています。彼らに「日本とドイツの違いがどうなの？」と聞くと、「環境の勉強も大事だけど、私たちは常に儲かるかどうかを考えている」と言います。もちろん、それは良い意味での「儲かる」です。

私はいつも「小金が回る仕組みをつくるのが大事」と言っています。せっけんづくりもボランティアではなく、報酬を払う。そうすれば、そのお金は地域に落ちます。もちろん、

## 眠っている 地域の資産を動かす

地方の人口減少についていえば、ここでも大きな家にお年寄り2人暮らしというケースが増えています。そのような家を農家民宿として活用するプロジェクトを始め、現在、修学旅行を対象に農業体験ができる農家民宿・民泊が80軒まで増えました。これが軌道に乗ると、眠っていた家という資産が動き始めます。例えば、農家のおばちゃんたちが縁側でカフェを開く。おばちゃんたちが作るおばんざいは旬のものが中心で、すごくおいしい。家ごとに味が違い、それが何よりのおもてなしになります。

それから、この道の駅「あいつマーガレットステーション」は、とても繁盛しています。地域の中には、道



Ayako

Fujii

の駅には出店できないけれど、二輪車で運べるぐらいの農産物売りたいという人もいます。それなら、昨年4月に、農家レストランと高齢者福祉、障害者福祉を合体した施設「あいつふくしモール」がスタートし、ここで一輪車を開催。出店する一輪車の数が増えるとともに、今やお年寄りのサロンにもなっています。このように、地方にも仕事はいっぱいある。地域は実はすごい底力を秘めているんですよ。

北海道から沖縄まで、その地域が好きで動いている人たちはたくさんいます。本気で地域を再生させようと思うのなら、地球環境基金のように、そういう人たちの活動を支援すればいい。地域を元気にするには、そこに住む人たちがパワーアップするしかないと思います。